語源について　　第２回

第１回に続き、会話につかわれている言葉の中から、言葉の起こりをさぐる。
“語源のたのしみ”岩渕鋭太郎　著書より抜粋して記載しました。

・頭ごなし：最初から押さえつけること。「頭ごなしにやっつけられる」「社長にかかると頭ごなしだから、いやになるよ」などと使う。
「こなし」は「こなす」の連用形で、「こなす」には、「こまかくくだく」「自由にあつかいならず」などの意がある。「腹ごなし」は食べた物を運動などをして消化することである。「頭ごなし」は相手の言い分も聞かずに最初から押さえつけることである。
・鼻つまみ：ひどく人にいやがられること。くさいものには鼻をつまんで避けるからであろう。「近所の鼻つまみだ」「世間の鼻つまみ者」のように言う。
・鼻持がならぬ：見聞くに堪えない。臭気が堪えきれないほどひどいということであろう。「彼の行動は鼻持がならぬ」などと言う。なお、「鼻持がならぬ」は、どちらかというと、いやみがあるという気持の場合に使う。「彼のやり方は全くきざで鼻持がならない」。
・減らず口：負けおしみを言うこと。「生意気になって減らず口をたたくからにくらしい」「あいつの減らず口には全く閉口だ」などと言う。この場合の「口」はしゃべる器官としての「口」である。
・口車：うまく言いまわすこと。話術を弄して相手を自分の計画に誘いこむこと。うまい言いまして相手をごまかすこと。「口車に乗せる」と言う。また、その逆に、誘いに乗せられることを「口車に乗る」と言う。
・寝耳に水：不意に事が起こって驚くこと。「寝耳」は睡眠中の耳の意。その睡眠中に突然、大水が出たという知らせを受けてびっくりするという意味で、突然起こった事件におどろくことをたとえで言う。なお、寝ている時、耳にはいって来てびっくりすることからだという説もある。「今度の転任は寝耳に水だった」「寝耳に水の大騒ぎだった」。
・五風十雨：気候の穏やかなこと。五日ごとに風が吹き、十日ごとに雨が降るという意味で、気候がおだやかで順調なことを言う。こういう気候のもとでは、農作物もよく出来、人心が安んずると言うので、転じて天下泰平なことをいう。
・秋の空：変わりやすいことのたとえ。秋の天候は定めがたい。そこで気持ちの変わりやすいことをたとえて、「女心と秋の空」とも、また、「男心と秋の空」などと使う。
・肩身：世間への面目。「肩身が広い」「肩身が狭い」と用いる。「肩身」は本来、

からだの「肩」と「身」のことであるが、胸をはって得意にふるまえるか、また、からだを小さくして気兼ねをするかという意。
・肩を入れる：みかたする。応援する。ひいきにする。「君に大いに肩を入れてるんだよ」などと使う。物をかついだり、持ち上げたりするのに肩を入れるからであろうか。「肩入れ」という名詞でも使う。「弱い方に肩入れする」。
・手を焼く：取扱いに困る。手をやけどして、二度と手をつけかねている状態から。「この子の世話にずいぶん手を焼いたよ」「この機械は故障が多くて手を焼く」。
・お手のもの：得意のわざ。手にはいったものの意。「そんなことはお手のものだ」「演説はお手のものさ」のように使う。
・屈指：すぐれていること。「ゆびおり」と同義で、多くの中で特にゆびおりかぞえられるほどすぐれていること。「屈指の大投手」「世界屈指の高層建築」
・骨抜き：大事な所を取り去ること。からだの中心である骨を抜き去ることで、かんじんな所を取り去ってしまうこと。「原案を骨抜きにする」「それでは骨抜きになってしまう」などと言う。
・しり馬：便乗すること。「人のしり馬に乗る」と使う。人の乗った馬の後方に同乗することで、転じて人の後についてその力によって物事をすることの意に使う。自分独自の考えで行動するのではなくて、人の後について行動することである。
・ねこかぶり：本性を包みかくすこと。表面はものやわらかにおとなしく見せかけること。「ねこをかぶる」と動詞的な表現もある。猫の習性から出た言葉。
・ねこの目：変わりやすいことのたとえ。猫のひとみは光線の強弱によってよく形が変るところから。「意見が猫の目のように変る」。
・たぬきねいり：眠ったふりをすること。たぬきは、いぬ科の東アジア特産の動物。たぬきは、銃でうったりすると、ころりと倒れてしまって身動きもしないでいるが、しばらくすると、いつのまにか起き上がって姿を消してしまう。この状態を見て、たぬきは眠ったふりが上手だと考えて、「たぬきねいり」という言葉を生んだ。しかし実際は、たぬきは非常に驚くと仮死状態になってしまうのだそうである。
・うなぎのぼり：急激に上昇すること。元来、うなぎが水中で身をくねらせながら垂直にのぼることから出た語。「温度がうなぎのぼりに上がった」「うなぎのぼりの出世」。
・ぬれ手で粟：骨折らないで利益をえること。「ぬれ手で粟のつかみどり」から。ぬれた手を粟の中に入れれば、粟がひとりでに手につくからであろう。

・二の足を踏む：しりごみする。躊躇（ちゅうちょ）すること。進むのをためらうこと。

「一億円もかかるとなると二の足を踏まざるをえない」。

・千鳥足：よろよろと歩くこと。しばしば酒に酔った人の足どりを形容するのに用いる。千鳥の歩きかたから来た言いかたである。千鳥はシギに似た鳥。シギはたいてい四趾なのに千鳥は三趾である。海辺を数百羽、数千羽むらがって飛ぶので「千鳥」の名がある。

・自画自賛：自分の事をみずからほめること。もとは、自分がかいた絵に自分で賛をすること。「当を得た政策と、政府では自画自賛している」。

・お茶をにごす：その場をいいかげんにごまかす。抹茶の点てかたを良く知らない者が、いいかげんにお茶を点ててその場をつくろったことからと言われている。「わずかなお礼でお茶をにごす」。

次回は生活のなかの言葉を抜粋してみます。（池田）

参考資料：“語源のたのしみ”岩渕鋭太郎著書